

「心に残る母娘との出会い」

呉服販売店勤務

(氏名割愛)

浴衣の季節を迎え陳列替えをしていた時、一組の母と娘が通り過ぎようとしていた。作業をしながら、「新作のいい柄が入っておりますよ」と軽く声をかけると、母娘は何げなく振り返り、私は二人と目が合ってしまった。振り向いてくれた二人に私は精一杯の笑顔で愛想を振りまき、飾ったばかりの浴衣地の前へ促していた。

母親は反物を手に取り、娘の肩へ上手に掛けて何やら楽しげにしていた。その後、何度も柄を取り替えながらやっと満足げに母親を振り、「これがいい」と藍染めの絞りを決めいただいた。

お仕立てを承り寸法を測ると、何度測っても桁(ゆき)に一寸も違いが出るので、「何かスポーツでもなさっていらっしやるのですか」とお聞きすると、「運動は苦手でもしておりますん」と言われた。お客様の身体の欠点を指摘するのはどうかとためらわれたが、勇気を出して、「左の肩のあたりから背にかけて少しはれて高くなっているようなので、そのせいではないでしょうか」と問いますと、「母がたまに風邪を引くぐらいで、他に病気になっただけで済ませ、結局、たって健康です」と言われます。「変ですねえ」と笑い飛ばして済ませ、結局、桁は中間を取り、採寸を終えた。母親は、最後まで左右の桁の長さが気になっていた様子だった。

そのできごとはずっかり忘れて日々忙しく過ごしていたが、約一年後、あの母と娘がひよっこりと来店された。いきなり、「普井さんは命の恩人です」と言われ、すぐには思い出せなかった。当時は買い上げのお札の手紙を出し、たまに催事の案内を送ったが、音さがなく忘れていた。浴衣の話が出て思い出し、手を取り合って懐かしんだ。一年前のことを聞かされて、初めてあの時の桁の長さの違いの意味を知らされた。浴衣をお買い上げになり家に帰られてからも二人は、採寸時の私の「ちよっと変ですね」がずっと気になり、腕の長さがどこでどう違うのか病院に行ってみてもらおうと、検査の結果、がんと診断されたとのことだった。

た。早期発見で本当に命拾いをしたと、再度深々と二人が頭を下げられた。

昨年のある時の接客を思い出すと、私はごく自然に対応していたように思う。ただ、初対面のお客様でもあり、言っていることと悪いことがあるので、その時の雰囲気をよく考えながら、どうしようかなと思いつながら、やはりさりげなくお伝えした。お伝えした一言がお客様にとっては重要なこととなり、結果的には良かったのだ。

私の知らないところで病と闘っていた母と娘。今はお嬢様もすっかり元気になられ、丈夫になられて結婚もし、二児の母になってお幸せに暮らしているようだ。今思えば販売は、店頭での一瞬の出会いが人の心をとらえ、接客を通じていろいろなプロセスがあり、心の底に何かを残してくれる。